

## 米国議会図書館 日本古典籍目録刊行までの 状況と集書傾向の大略

◎渡辺憲司，立教大学

私が、本蔵書の存在を具体的に知りえたのは、1996年、インディアナ大学客員研究員として滞在中、同大学スミエ・ジョーンズ教授の御教示によるものである。その存在を確認すべく、私は同年の秋、これまで、日本国内における未公開文庫・図書館の蔵書調査と目録作成のためのプロジェクトを組んで共同作業を行ってきた市古夏生（お茶の水女子大学）・揖斐高（成蹊大学）・木越治（金沢大学）等に、来米を依頼した。これに、当時揖斐のもとで日本近世文学の研究を行っていたマーク・ボーラー（イエール大学院生、当時）を加えた5名で、L.Cに直接おもむき交渉を重ねた。その結果、東洋部部长ヘレン・ポー氏を始めL.C側から、所蔵日本古典籍の公開にむけ全面的な協力が得られるという確約を取り付けることができた。

このあと、同館所蔵の未公開日本古典籍の状況について立ち入り調査を行なった。その結果、明治以前の日本古典籍（いわゆる和装版本・写本）が、4800点余り、冊数にして15,000冊有余存することが確認された。

1980年代の終わり頃から本蔵書公開促進のための努力が重ねられてきた。その第一の功労者は、元L.C職員本田正静氏である。氏によって、1990年代初頭から、日本文学・演劇関係の書目計627点及び和算関係書目計403点の合計1,030点の書目についてはすでに整理が行なわれ、それぞれ『Japanese Literature, Performing Arts, and Reference Books/ A Bibliography』（小西甚一監修 1996年）及び『Japanese Mathematics』として議会図書館より目録が刊行されていた。これらは、先駆的かつ貴重な仕事と評すべきものである。本目録には、本田氏の御好意により、これら二種の目録に記載された全ての

書目のデータを掲載することができた。

しかし、全貌が公開されなかったのは、L.C側が、この間、これらの古典籍を一貫して第二次大戦後の没収資料の一部とみなし、秘密書類に指定して一括管理していたため、その努力はなかなか実を結ばなかったためである。先に述べた如く、L.Cの前向きな姿勢を受けて、われわれは、プロジェクトを組織し、文部省より、1998年度から3年間にわたる科学研究費助成金の交付、さらに又、東芝国際財団の援助を受け、この調査を開始し、又調査を終えることが出来たのである。

我々がここに目録化したのは、米国議会図書館アジア課（Asian Division）のJapanese Sectionが管理する書庫に保管されている書目のうち、明治以前として区切られている区画の書籍すべてである。一般に、Japanese Rare Booksと称されている書物群で、現在（2002年12月現在）のところで、Jefferson館とAdams館の書庫に分けて保管されている。ただし、仔細に見れば、明治期刊行の書籍も少なからずあり、ごくわずかではあるが近代活字本や洋書も含まれている。なお、現在、保存課（conservation）の管理に帰している百万塔陀羅尼や幕末・明治期の銅板画及びペリー来航関係絵巻なども、もとはこのJapanese Sectionの書庫に保管されていたとのことであり、この他にも、地図や絵本などが他のSectionに移管されたとのことで、その詳細については不明なままである。本目録では、保存課より提供されたごく一部の資料は採録するにとどめざるをえなかった。

本格的に日本関係の書籍が収集されたのは、イエール大学の朝河貫一教授が、議会図書館の要請をうけて直接日本に赴き、書目を選定し購入して以後のことである。朝河氏に関しては、小峯氏の発表があるのでこれに譲ることとする。

第2次世界大戦後、ワシントン・ドキュメント・センター（組織としては、旧アメリカ合衆国中央情報局外国語文書部の一部をなす）から、日本語関係の書物約35万冊が議会図書館に譲渡された。これらは、日本の旧陸軍から没収しアメリカ本土に移管された資

料の一部である。そしてこのとき、議会図書館の日本古典籍も飛躍的に増大したのである。本目録に記載した書目の7~8割がここに属すると考えられる。

今回の調査によって、はじめて、これらの書目の全貌が明らかになったのであるが、これらの書目の由来やワシントン・ドキュメント・センターに収まるまでのくわしい経緯等については、すべてこれからの調査・研究によって明らかにされねばならない。その意味で、すべてはこれからであるといっても過言ではない。本目録によってその蔵書印だけをみても、陸軍参謀本部をはじめとして、陸軍予科士官学校・陸軍士官学校文庫・大阪陸軍地方幼年学校・熊本陸軍幼年学校所蔵・仙台陸軍地方幼年学校等々があり、一口に旧陸軍の蔵書といってもその内容・出自は多岐にわたる。

議会図書館における戦前からの集書は、日本の全体像を知る上での基礎資料たることを念頭においたものである。かなりバランスの取れた蔵書傾向を示していると評してよいが、1600年以前のいわゆる貴重書の類はほとんど見出すことができないし、1700年以前の文学書・歴史書の類も豊富であるとは言いがたい。

これらの中でワシントン・ドキュメント・センターからの譲渡された旧陸軍・海軍本のなかには、兵法関係の稀覯本が多く含まれている。この点について若干述べておく。

既に述べたように、米国議会図書館の収蔵典籍は、広くまんべんなく、集められているのが特徴であるが、この中で、もっとも書籍点数の多いのは文学関係の761点である。これに次ぐのは、武学・武術の555点、和算を含む理学の505点である。文学関係は、日本にあるものが多く、ここにだけ所在が確認されるといった作品は少ないようだ。既に小西甚一氏が紹介された中村仲蔵関係の日記等がその例とはなるであろう。

これに対して、武学・武術の555点には、日本で所在の確認されていないものが多いのが特徴である。明治期のものと思われるものや、さらに詳しい調査が必要ではあるが、国

書総目録によると、204点ほどが、日本の図書館・文庫等で確認されていないものである。4箇所以下の（そのほとんどは1箇所のみ）の所蔵である）所在が確認されるものは、72点である。この内には、旧海軍兵学校・旧陸軍兵学校等と所在が記されているものも含まれ、当然米国議会に移されたもので、本目録に収められているものも含むであろうから、所在不明のものはさらに多くなるであろう。大雑把に見積もっても、約半数以上は、日本で所在が確認されていないものということになるであろう。

武学・武術関係の書物は、内容のかなり重複したものが多いため、これをもってして、貴重本の存在の多さを過大評価するのはいかなるものかとは思いますが、今後の武道・武術の研究にとって、米国議会図書館がもっとも重要な図書館となることは間違いない。

又、一例をあげれば、江島為信の「新篇」も存在する。江島為信は、「身の鏡」・「理非鏡」等の作品で知られる仮名草子作者である。彼が兵法に手を染めていたことが、これで始めてはつきりする資料である。近世前期において、兵法が戦術の書としてではなく、泰平の世になった武士の処世的な生き方を示す兵法<教訓書>としてが変質していることを示すことにもなるであろう。「葉隠」等で理解されていた日本の武士の生き方が、一般的なものではなく極めて特殊なものであることを、これらの資料が物語ると言ってもいいかもしれない。限られた資料で語られてきた日本の武士のイメージの再考を促すものであると言ってもいいであろう。今後の調査を待ちたい。

この他、詳しく述べる時間がないが、本田氏が整理された和算関係のまとまったコレクションや豊富な北方史やアイヌ関係資料など、世界的にも注目される蔵書である。

米国議会図書館日本古典籍目録の刊行が、今後の日本研究に裨益し、その研究の進展に大きな貢献をもたらすであろうことは私どもは信じて疑わない。朝河貫一をはじめとする先人の努力に改めて感謝すると同時に、彼等がこいねがったであろう日米両国のより強固

なるパートナーシップ形成にいささかでも寄与できればと心より願う次第である。

追記 本目録の刊行に際しては、L.C 職員始め多くの方のご支援があった。殊に、スミエ・ジョーンズ教授・ヘレン、ポー氏・本田正静氏・日本国文部科学省・東芝国際財団に深く感謝申しあげる。

## BOOK REVIEWS

**Marius B. Jansen, *The Making of Modern Japan***, by Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 2000. 871 pp. + prefatory material 14 pp. Hardcover \$35.00; ISBN 0-674-00334-9. Paperback \$18.95; ISBN 0-674-00991-6.

©Barry D. Steben, National University of Singapore

Professor Emeritus Marius Jansen passed away on December 10, 2000, but to crown a lifetime of distinguished publications, he left the world this book as his parting gift. It is indeed fortunate that in spite of failing eyesight, he was able to complete it—and to see it published one week before his death. In spite of the very reasonable price of both the paperback and hardcover versions, its size will likely discourage its use as a textbook in all but the most ambitious courses on early modern and modern Japanese history. But for the very same reason, it is sure to be used for many years as a reference and resource tool by both students and scholars interested in various topics in Japanese and East Asian history. Each of the twenty chapters can serve in its own right as a manageable reading assignment on a particular aspect of early modern or modern Japanese history, and there is no lack of fresh perspectives based on recent scholarship as well as Jansen's distinctive Sino-Japanese research background. In 871 pages, needless to say, Jansen is able to give a much fuller treatment of the rise of modern Japan than any book of standard textbook size.

Jansen is a past master at writing narrative history, and his account frequently has the power to grip the reader and make history come alive through the people who actually lived it, at times with the aid of their own words. The first two paragraphs present a highly vivid, yet concise, description of the battle in 1600 that ended Japan's medieval age and laid the foundation for four centuries of great cultural creativity. A major reason for the particular vividness of the description here is that Jansen is describing a pair of Tosa-school screens depicting the battle, screens that Ieyasu presented to his adopted daughter as part of her dowry. The story of a momentous historical event that took many thousands of lives is encapsulated by a Tosa-school master painter on sixteen panels, and then encapsulated again by a Princeton-school master wordsmith in about 500 words.

The narrative progress here from representation to historical event to interpretation, and then back to historical event and representation, is a good symbol for the task that Jansen has set himself in this book—to cover the rise of modern Japan comprehensively by alternating between descriptions of events and socio-political structures, descriptions of cultural and artistic movements, quotations of written representations of these events and cultural phenomena by both European and Japanese contemporaries, and summaries of some recent interpretive perspectives. While the book, though gigantic, remains highly readable to the general reader and the university student, most scholars of Japan—unless they are extremely widely read—are also likely to find facts and perspectives that they were previously unaware of among its pages.

In the preface Professor Jansen gives an interesting intellectual autobiography in which he explains the reasons why his generation had to pursue breadth in their scholarship and teaching and take up all kinds of different topics of inquiry. As an attempt to synthesize and summarize the results of half a century of his own research and that of his students and successors in the field, the present work follows in this same tradition. Inevitably, due to the very comprehensiveness of the book and its concern for narrative readability, specialists in particular areas of early modern or modern Japanese history are likely to find certain